

实用主義者の家長——リー・クアンユー 1965-2004

花 崎 泰 雄

実用主義者の家長——リー・クアンユー 1965-2004

花崎 泰雄

どうして私が厳しいのかといえば、厳しくしないとどうなるか知っているからです。

リー・クアンユー，1981年8月16日¹

1. はじめに

リー・クアンユーは有能な経営者だった。トーマス・スタンフォード・ラッフルズが19世紀はじめに目をつけた「地の利」を生かして、シンガポールをアジア有数の商業都市国家に育てあげた。

リー・クアンユーを偉大な政治家ともちあげた人は多い。「構想力を持った優れた政治家」（ジョージ・ブッシュ）、「かれは一度たりとも過たなかった」（マーガレット・サッチャー）、「今日のシンガポールの成功は彼のリーダーシップによる」（ジャック・シラク）、「小さな島を偉大な国家へほとんど独力で作りあげた」（宮沢喜一）²。なかでも、ヘンリー・キッシンジャーはリーについて言った。「ある政治家たちの能力と彼らの国のパワーの不一致は、歴史の非対称性といわれるものの一例である」。キッシンジャーはリーの有り余る能力と、彼の能力と比べてあまりに狭いシンガポールという小さな舞台の不釣り合いについて語ることで、リーに賛辞を送った。また、リチャード・ニクソンは次のように語ってリー・クアンユーを称えた。リーが別の時代に、別の場所に生きていたとしたら、「チャーチル、デイスレーリー、グラッドストーンと並ぶ大人物となったことだろう」³。

リー・クアンユーがオランダ植民地時代末期のインドネシアで生まれていたら、スカルノをしのぐ偉大な独立革命の指導者になって

いただろうか。また、リーはホー・チ・ミンになりえたか。それを空想するのは楽しいが、空想したところで意味はない。

リー・クアンユーは、そのドライな人間観と功利的な政治経済哲学とで、シンガポールをマレー世界に浮かぶりッチな中国系の現代都市国家につくりあげた。さらに、スカルノ、スハルト、フェルディナンド・マルコスが権力者の栄光と悲惨をたっぷりと味わったのに比べ、彼はあざやかな身の処し方で、同じ時代を生きたこれらの東南アジアの政治家たちがなし得なかった“偉業”を達成した。「1998年にスハルトが退陣に追い込まれたとき、1990年に首相をやめていてよかったな、と思ったものだ」⁴と述懐しているように、リー・クアンユーは惜しまれつつ自らの意思で引退し、引退後も隠然たる力を残して院政を敷き、時間をかけて長男を自分の後継者として育てあげ、最後に首相につかせた。中国伝統の見事な家長を演じた才人であった。

2. 修身齐家治国平天下

リー・クアンユーはシンガポール国家の建設に没頭したが、実は国家という組織よりも家族の絆の方を信用していた、と言ったことがある。彼は次のように語った。西洋の現代国家は、かつては家族が担っていた役割までを肩代わりしている。このことがシングル・マザーの増加を触発した。父親の役割を国家が果たしてくれるからである。だが、そういった実験をシンガポールで行うことはご免こうむりたい。家族が社会の基盤である、として、リーは「修身齐家治国平天下」という中

国の伝統的考え方を賞賛した。政権は来たり、そして去る。最後に頼れるのは自分と家族だけだ。それが東アジアの文化の核心である。支持してくれればすべての社会問題を解決してやろう、という西洋とは違うというわけだ⁵。

リー・クアンユーは自らを律することにおいて、彼の同時代人である、スカルノ、スハルト、マルコス、マハティール・モハマドを凌駕した。彼らの中でぬきんでて清潔な政治家だった。ただ、彼の腐敗についての考え方は変わったところがあり、リー・クアンユーはマルコスを「英雄としてスタートし泥棒に終わった」と酷評したが、スハルトについては「スハルトは大スルタンであり、それだけの特権があると考えていた……だからわたしはスハルトを泥棒だとは考えていない」と弁護した⁶。政治家としてマハティールも惜しまれてトップの座を去る演出で送られたが、彼は政権末期に一時は後継者に指名したアンワル・イブラヒムと醜い権力争いを繰り広げてしまった。リー・クアンユーは十分な政治的力を残しながら自らの意思で権力者としてのトップの座を退いて、ハッピー・リタイアメントを実現して見せた。

リー・クアンユーは 65 歳を自身の引退の年齢と想定していたという。1984 年の建国記念日集会で、リーは演説し、「アメリカの大企業の慣習では、社長は 65 歳で引退するのですが、これにはちゃんとした医学的根拠があると思います。社長は円滑な世代交代をおこなって、その企業の成長が続くようにしなくてはなりません。私は、シンガポールのためにこれと同じことをする義務があるのです」と語っていた⁷。そこで彼は、65 歳になる 1988 年を引退の年と決めてその準備を始めた。ゴー・チョクトンを後継者に定めたが、1988 年になって、隣国のしたたかなスハルト大統領

やマハティール首相を相手にわたりあうには、ゴー・チョクトンはまだ経験不足ということになり、引退の時期を 2 年先に延ばして 1990 年にしたといわれている⁸。

1990 年にゴー・チョクトンに政権を禅譲し、自らは上級相という名前で閣内に残った。2004 年にゴー・チョクトンが 63 歳で首相の座を退くまでの 14 年間、リーは上級相として事実上ゴー・チョクトンを指導し、ゴー・チョクトン政権で副首相を務めた息子リー・シェンロンの成長を待った。2004 年、ゴーが首相の座をシェンロンに譲った。ゴーはリー・クアンユーにかわってシェンロン内閣の上級相となり、クアンユーは顧問相と言う名で閣内に残った。代表権を持つ社長を、代表権のない会長と顧問が事実上指導監督する集団指導体制でシンガポールを運営している。

リー・クアンユーは、シェンロンは息子だから首相になれたのではない、彼にその能力があったからだ、という態度をとっているが、父リーは子リーを巧みに誘導し、援護し、後継者に育て上げた。

リー・シェンロンは 1952 年生まれ。軍人として准将まで昇進し、ケンブリッジ大学、ハーバード大学で数理経済学や公共政策決定論、国際関係論などを学んだ。1984 年の選挙で当選し、すぐ商工国務相に任じられた。このときから、リー・シェンロン後継説が出始めた。リー・クアンユーは首相辞任後、上級相としてゴー・チョクトン政権を指導し、同時にゴー・チョクトンのもとで、リー・シェンロンを副首相につかせて、帝王学を実地に学ばせた。その間 10 数年をかけて、シンガポール国民に対して、リー・シェンロンの能力を納得させた。

このように、リー・クアンユーには、社員から「カミソリ」とよばれているような企業

CEO 並の的確な将来に対する読みと用意周到があった。リー・クアンユーは予定していた65歳の引退年齢に達する2年前にはゴー・チョクトンを後継者に定め、政権内部での後継者争いの発生を避けた。さらに、政権禅譲の前の年の1989年には、近隣諸国との軍事協力強化計画、退役軍人の緊急総動員訓練、食料・水緊急事態訓練、防空訓練などの引き締め効果を狙った軍事訓練を行った。また、米軍への軍事施設一部貸与計画によって、米軍事力をシンガポール防衛に組み込んだ。さらに、マレーシア・ジョホール州政府との間の水供給協定締結に専念した。このようにして、大きな問題を自らの手で処理しておいて、後継ゴー・チョクトンに政権を引き継いだのである⁹。

固い決意の指導者

リー・クアンユーは彼の施政をふりかえって「小さな後悔は数多くあったが、基本的なところでは過ちをおかさなかった」と、自らのリーダーシップの的確さを誇った。西洋世界からのシンガポール批判である、政治的・文化的な発展の犠牲のうえに達成した経済的発展、という点にたいして、次のように反論した。「国民が求めるものは何か？ すき放題に社説を書く権利か？ 国民が求めているものは、住む家であり、医療であり、仕事であり、教育だ」¹⁰。

私生活の面でも、リーは「幸せな結婚をし、幸せな家庭を持ち、自慢に値する3人の子どもに恵まれた。もうこれ以上望むことはない」と述懐している¹¹。

リー・クアンユーは「修身齐家治国平天下」のうち、「修身齐家治国」までは完璧にやり遂げた。リーは「治国」にあたっては次のような考えを持っていた。シンガポールはマレー

世界の中に浮かぶ中国系人種が多数を占める国家である。シンガポールが発展するためには、ヒンドゥー文化に由来する優しく穏やかなソフトな文化の型から韓国、日本、中国、ベトナムなど中国系のハードな文化の型へと移行する必要がある、とリーは考えた。「国民を高度の科学へと前進させるのを妨げる価値観を払拭するには、勇敢で決意のかたい指導者が必要である。強い意志をもってしなければ、変化加速する価値観の採用を強制することはできません」¹²。では、シンガポールにおける「平天下」の内容はどのようなものだったのだろうか。

3. ハリーとよばれた男

リー・クアンユーは英語を話す中国系シンガポール人の家に生まれた。英語で教育を受けてケンブリッジ大学に留学し、弁護士になった。リー・クアンユーは30代までハリー・リーとよばれた。ハリーという英語名はイギリスかぶれだった祖父がつけたもので、後年、リー自身は歓迎していなかったと回顧しているものの¹³、60年代には「ハリー、あなたはスエズ以東で最も生粋の英国人ですよ」とイギリス政府高官に言わせるような人物だった。そのような人物が、身につけた西欧的価値を否定し、いわゆるアジア的価値を前面に出して、国家経営の理念にしようとしたのはなぜだろうか。リー・クアンユーにインタビューした『フォーリン・アフェアーズ』のファリード・ザカリアは、リーの東アジアの伝統文化への固執は、彼が政治活動をはじめたのちに強まったものと判断した¹⁴。たんなる文化的先祖帰りではなく、意図的な回帰であろうというのだ。

リー・クアンユーはイギリスのエリート漂う人物だった。リー・クアンユーの話し方に

は、毒舌、からかい、言葉によるサディズムのようなものが見られたと彼の伝記を書いた、ミンチンは言っている¹⁵。たとえば、『フォーリン・アフェアーズ』のインタビューで、「アメリカのシステムの何が間違っているのか」と質問されたとき、彼はこう答えた。「アメリカのシステムのどこが間違っているかを指摘することなど、私の関知するところではない。むしろ、私が責務と考えるのは、うまく機能するはずもない社会に（アメリカの）システムが無条件に押しつけられているのに反対していくことである」¹⁶。

NHKが1975年5月放送のニュース番組用にニューヨークで録画したリー首相インタビューでも、リーは良くも悪くも秀才政治指導者の弁舌の切れ味を示した。NHKのインタビュアーが、アジアにおける日本の役割についてリーに意見を求めると「それは日本が決めることです」。もし日本が政治的に全面に出て、役割を果たすとしたら、という質問には、「それはいけません」と、日本がおとなしくアメリカの核の傘の下にどどまり、東南アジアの対等なパートナーになってくれさえすればそれよいと語っている。インタビューのクリプトを読む限り、インタビューは短く、リーはもの足りなかったようである。NHKがどうもありがとうございましたと、インタビューを切り上げたさい、リーは「これがたんなる社交のおしゃべりに終わらないことを希望します」。NHKが、まったくおっしゃるとおりです、と気のないあいづちをうつと、「おっしゃるとおりといっても、何がおっしゃるとおりなのか」とリーはたたみこんだ。「そのことを日本国民に伝えます」とNHK¹⁷。

1976年11月の東京新聞・論説主幹とのインタビューでも、リーは秀才政治家にありがちな冷たさを示した。アセアン諸国と日本の

協力関係について意見を求められると、「これはあきあきする質問です。すでに大勢の人がこの質問をし、大勢の人が答えています。すでに出ている答えを少し言いかえてみても意味がないでしょう」。インタビューの後半で再び「東南アジア諸国は、日本との経済関係の緊密化に対して、どのように反応するでしょうか」と質問され、リーは「それは前に出された質問と同じ質問です」と、インタビュアーに対して苛立ちさえ見せた¹⁸。

このように明晰で、自信にあふれ、鼻っ柱が強い秀才が抱いていた考え方の基本は、マルクスに「俗物の元祖」と酷評されたジェレミー・ベンサムのような部分ではなからうかと想像される。

功利性の原理とは、その利益が問題になっている人々の幸福を、増大させるように見えるか、それとも減少させるように見えるかの傾向によって……すべての行為を是認し、または否認する原理を意味する¹⁹。

リー・クアンユーにとっては、これ以外の原理は、どうでもよい理念的装飾にみえていたようである。リー・クアンユーは自らの立場を、社会主義者と保守派の中間に位置するリベラルであると説明したことがあった。質問者がリー・クアンユーがリベラルと自称するのを聞いて驚く人もいるのでは、というところ、リーはアメリカ風のリベラルではなく、経済学的な意味でのリベラルであり、プラグマティスとであると語り、最後は面倒になったのか「好きに呼んでくれ」と締めくくった。社会主義者として出発したリーだったが、のちに資本主義経済がもつ企業家精神 (entrepreneurship) の信奉者になり、「今日

の資本主義はこの企業家精神を加えたことで、私が若い頃に見た資本主義とは違う」と主張するようになった²⁰。

リー・クアンユーは功利主義者であると同時に、無用な情緒を排した冷徹なリアリストであった。リー・クアンユーは1966年6月シンガポール大学民主社会主義クラブの会合で、リアリストの真骨頂を見せつけるような演説をした。演説の内容はアセアン結成を機に東南アジアの国際環境を考えるものであった。その演説の中で、リーは「アジアの植民地解放における重要な点は、実際に、ヨーロッパ勢力を文字通り打ち負かした土着勢力はなかった——インドシナでフランスを打ち負かした以外には——ということです。それは計算された撤退だったのです」²¹と、若者の気分を逆なでにするような発言をした。続いて、

植民地からの開放は……白人たちが来る前の、アジア人だけがみんな一緒に愛し合い、平和に、互いに助け合って、みんなが幸せに暮らしていた頃に戻ることを意味するのだなどと信じてはいけません。そうではないのです。白人たちが来る前は、大きな魚が小さな魚を追っかけ、小さな魚は小エビを追っかけていたのです……だから、この地域で最小の領土しかもたないわが国としては、当然、心配しないわけにはいきません²²。

シンガポールが生き残ることがシンガポール国民の最大の幸福であり、シンガポールが生き残るために必要なものは、国民の自覚などという曖昧なものではなく、優れたリーダーシップである、とリーは考えたようである。リー・クアンユーは「PAP（人民行動党）が政府であり、政府がPAPであることについて、

悪いことだとは思っていない」と語ったといわれる。彼にとってよい統治とは「断固たるリーダーシップ、有効な、断固たるリーダーシップ」²³であった。

風見鶏ではないリーダー

「指導者たる者の最も重要な要素は、人を引っばっていく能力と意思であり、世論調査や圧力団体などに引っばられないことです。むろん、体が丈夫で、神経が太く、頭がよくて、鉄の意志をもっていれば、それも結構なことですが」²⁴とリーは言う。リー・クアンユーは「世論調査や人気調査を気にかけてしたことない。それは弱いリーダーのすることである。自分の位置づけの上下に気をとられるような者はリーダーといえない」と、ごう然と語ったこともある²⁵。

リー・クアンユーのこうした発想は、あからさまな功利主義に根ざしている。たとえば、女性の学歴が高まることと少子化が比例関係にあるのは世界中で見られる現象だ。シンガポールでも同じような高学歴家庭の少子化が進んでいることに、リーは国家政策上の危機を感じ、1983年の建国記念の日の演説で次のように語った。

シンガポールの男は自分と学歴が同じか、それより下の女性と結婚する傾向がある。したがって大学卒の女性は大学卒以上の学歴の男性と結婚して家庭を持っていることが多い。1980年の国勢調査統計では35歳から39歳までの既婚女性の学歴別の出産は、学歴なし3.5人、小学校卒2.7人、中学校卒1.9人、高校卒2.0人、大学・高専卒1.65人。シンガポールの最大の資産は国民の能力であるから、大卒女性がもっと子どもを産むような政策が必要だ。大卒女性が1.65人の子どもしか産まないパターンによる損失は、シンガポールが

育てる平均年 2000 人の大卒者の 20%、400 人の損失に相当する。シンガポールが外国から雇用する大卒者は年間 80 人以下である。年間 400 人の損失はうめきれない。以上のように理由ずけて、リー・クアンユーはこう言い放った。「なんとかして次の世代が才能のない者ばかりにならないようじっくり時間をかけて考えてみる必要があります」²⁶。

高学歴の夫婦に対して出産を奨励するため、第 3 子以上には幼稚園・小学校入学登録で優遇する政策を展開する一方、1983 年には貧困家庭の夫婦に対しては、第 3 子以上を産ませないようにするための不妊手術奨励を始めた。これはリー・クアンユーの次のような根深い確信に基づいていた。低所得・低教育水準の両親からは平均以下の知能を持った子どもしかできない、と彼は考えていた²⁷。

リー・クアンユーは人間の能力の遺伝ということに奇妙なほどまでにこだわった。たとえば、ユダヤ人にはなぜ優れた頭脳の持ち主が目立つのか、ということについてのリー・クアンユーの推測は次のとおりである。セファルディとよばれるスペイン・ポルトガル系の地中海周辺のユダヤ人はそれほどではないが、中部・北部ヨーロッパのアシュケナジとよばれるユダヤ人は優れた頭脳を輩出している。それはアシュケナジにあっては集団の中の優れた頭脳を持つ若者がラビ（律法学者）となり、裕福な家の娘と結婚し、子どもをもうけた。そのような習慣を永らくにわたって繰り返したことでやがて一大頭脳集団を形成するようになった。セファルディにはそのような習慣はなかった。また、カソリックにあっても優秀な頭脳の持ち主がカソリック僧になったが、カソリックの習慣に従って子孫を残すことはなかった²⁸。

1 人で 2 票

リー・クアンユーの徹底した功利主義原則の優先は次の提案によくあらわれている。彼は有権者全員が一律に 1 人 1 票の投票権とされていることに疑問を呈し、場合によっては行使できる票数にウエイトをつけてもよいのではないかと、語ったことがある。1994 年 5 月 8 日、リーは訪問先のオーストラリアで同行のシンガポールの記者たちに、やがては投票権にウエイトをかけること考えてもよいのではないかと私見を述べた。その論理は次のようであった。35 歳から 60 歳までの既婚・世帯持ちの人々には、2 票の投票権を与えてよいのではないか。なぜなら、この人々は経済と社会により多くの貢献をしているからだ。彼らには彼ら自身と子どものための票が与えられるべきである。記者が、ではいつごろそうした変化が必要になりそうか、とたずねた。リーは「15 年か 20 年後かな」と答えた²⁹。

このようなリー・クアンユー統治下のシンガポールに対して、西洋世界からはリー・クアンユーをビッグ・ブラザーとするオーウェリアン・ステートであると揶揄する声が上がった。しかし、外国からの批判にも、リー・クアンユーは動じることがなかった³⁰。

「もし私が干渉しなかったら…」とリー・クアンユーは言ったことがある。「市民の私生活に干渉すると、しばしば私は非難されている。しかし、私がそうしなかったら、われわれは今日、ここに存在していなかっただろう」と、リー・クアンユーは 1986 年のナショナルデー集会で演説した³¹。

リー・クアンユーの政治家としての原点は、1965 年のマレーシア連邦からのシンガポールの分離独立にあった。当時の連邦首相のトウク・アブドゥル・ラーマンは、シンガポールの分離独立決定の前日、リー・クアンユー

ーに次のように言った。「君たちがマレーシアからいなくなり、我々が議会や選挙区で議論を戦わせることもなくなれば、我々は再び友人になるだろう。そして我々はお互いを必要とし、協力し合うだろう」³²。しかし、1965年のマレーシアからのシンガポール切り離しはリー・クアンユーにとって、首相を辞めた1990年まで、かたときも去ることのない生存に関わるトラウマとなった³³。

4. シンガポールはなぜ成功したのか

英国の植民地としてのシンガポールの建設者ラッフルズの銅像がシンガポールには今なお建っている。シンガポールという都市国家の心性は普通の脱植民地国家のそれと違うところがある。リー・クアンユーは、この点を引き合いに出して、ラッフルズが描いた「シンガポールがインドと中国の間の商業センターになる」というビジョンにひかれて、「イギリス人、アラブ人、華人、インド人その他の貿易商人が……自由で平等な競争という原則にひかれてやって来たのです」と、シンガポールが開かれた精神の国であることを強調したことがある³⁴。

シンガポールの成功はラッフルズの想像を凌駕するものだろう。そのシンガポールの成功の理由をリー・クアンユーは次のように数えあげている。①シンガポール人は遺伝と文化的理由により、適応に俊敏で、生産性の高い労働者になった②どの社会階層にどれだけ投資するのが有効か、集团的成功の鍵である士気の向上に指導層が気を配った③指導層とその政党PPPは教条や理念の求める政策にまったくこだわらず、現実の状況が変われば、それにあわせて政策を変えた³⁵。

こうして出来あがったのが、行政が立法や司法を支配し、さらには国民の私生活、思想

信条にまで介入を辞さないという行政国家シンガポールだった。リー・クアンユーはこれを次のように述べて正当化した。すべての民はよい国家を求めている。しかし、新興途上国においては、数少ない例外を除いて、民主主義がよい政府をもたらしたことはない。なぜか。民主主義は発展に必要な治安と規律を打ち立てられないからだ。まずは経済発展優先、民主主義はそれからだ。リー・クアンユーにとって、よい政府とは、正直で、きちんと国民を守り、安定し秩序ある社会ですべての人々に向上の機会を与え、子どもたちに自分たちよりもっとよい生活を与えうる、政府のことであった³⁶。

功利主義者としての面目躍如たる主張であるが、リー・クアンユーが他の同時代東南アジア指導者にぬきんでているのは、「われわれは腐敗が生活の一部となっている地域に暮らしているのだ」³⁷という自覚のもとに、自らの主張を現実に変えて見せたことである。

イギリス統治時代に創設された CPIB (Corrupt Practices Investigation Bureau, 腐敗行為調査局) を、リー・クアンユーは彼の時代になって活用し、政治家、官僚、警察官など腐敗行為を徹底的に操作の対象にした。このことで、シンガポールは1998年には、世界で7番目に位置する清潔な政府を持つ国と評された (ベルリンの Transparency International 調査)。

経済開発にまい進する清潔な政府。その手段として政府幹部に優秀な頭脳を集める必要があった。「経済開発の鍵は閣僚の能力とそれを支える官僚の質である」³⁸と信じるリーはためらわず金銭を人集めのインセンティブとして使った。

シンガポールの閣僚は世界水準から見ても非常に高額のサラリーを得ている。シンガ

ポールで政府に批判的な市民運動を行っているグループ、シンクセンターが2003年に次のように閣僚の以上に高いサラリーを批判したことがある。シンガポールで年間10万ドル万円以上の年収がある人はシンガポール人の20パーセント以下である。シンガポール政府の閣僚の基本給は年間1,166,844シンガポールドル以上で、これら20パーセント以内の人々の年収を1ヵ月で稼ぐ。

シンクセンターは2000年7月にエイジアン・ウォールストリート・ジャーナルが伝えた数字を使った。それによると、シンガポール首相の基本給は年額110万ドル、閣僚は655,530-819,124ドルで、米大統領の20万ドル、各省長官の157,000ドル、英首相の17万556ドル、より大きくぬきんでている。

シンガポールの閣僚の給与は日本でいえば人事院にあたる国家給与会議(National Wage Council)の勧告を受けて決まる。国家給与会議は閣僚の給与額として、シンガポールの銀行家、弁護士、企業トップ経営者などの6業種の上位所得各4人、計24人の収入の平均額の3分の2を勧告している。

このシンガポールの行政責任者の高給の背後には、リー・クアンユーの経営哲学がある。シンガポールの政治と行政には有能な人材が必要だ。有能な人材はそれなりのペイを出さないと高給に誘われて民間企業に流れてしまう。「われわれの世代は消滅する恐竜のようなものだ」³⁹とリー・クアンユーは1994年、閣僚の高給の必然性について議会に語りかけた。

リー・クアンユーの世代はシンガポールとともに育った。金銭的な報酬よりも志で活動した。しかし、シンガポールの将来のためには人材は欠かせない、とリーは考える。何がよい政府を作り出すのか？ アメリカのリベ

ラルの信念では、それは三権分立であり、議会と政府と司法が相互にチェック・アンド・バランスの機能を維持していれば、少々頭の悪い人間を選ぼうと政府は機能する。それが彼らの信念だ、とリーは言う。「アジアに生きてきた経験から、私は別の結論に達している。よい政府を作るためには、よい人に政府を任せなくてはならない」⁴⁰。

そうしたよい人がほしい実務家のリー・クアンユーが大学に望んだことは、第1に、教師、行政官、会計士、建築家、弁護士、技術者の養成で、第2に、より重要なこととして、広い知識にもとづいて国家が直面する問題を考えるリーダーの育成だった。リーは「高等教育機関が創造的な思想家や研究者のグループを産み育てた例はほとんどない」とし、大学には国家建設に役立つ人材を育てる機能を期待した⁴¹。

リーが大学に求めるものは政府を切り盛りするエリート育成であった。彼は包み隠さずそのことを正面切って口にした。1966年1月、シンガポール大学歴史学会での集まりで行った演説の最後の部分で、リーは次のようにあけすけに彼が求める大学の役割を語った。シンガポール首相として大学人にはありとあらゆる自由を与えるが、医学部学生1人あたり年間7000ドル、文学部学生で2500ドル、理学部学生で3500ドルという財政支出にみあった教育効果を挙げてほしい。「少なくとも学生の1パーセントは非常に頭がいい…この1パーセントがわが国にとって決定的な作用をするのです」⁴²

変化と伝統

リー・クアンユーは競争的環境の下でエリートを育成し国家幹部として登用する一方で、福祉国家といわれる国々が採用してきた福祉

政策に対して、不信感を覚えていた。シンガポールのような小さな経済では福祉政策にふける余裕はなく、そんなことをすれば、貧困線ぎりぎり社会をぶち壊すことになるだろうと感じていた。リーにとって、福祉政策とは国民の必死に働く気持ちを喪失させてしまうような制度に思えた。福祉政策は勤労意欲を喪失させて依存心を増幅させる。また、恩恵が権利になってしまえば、皆が同じ結果を要求するようになってしまう。リー・クアンユーはレーガン政権、サッチャー政権、中曽根政権などの新保守主義に影響を与えたハイエクの思想に傾いていた⁴³。

リー・クアンユーは福祉の基礎は家族にあると主張してきた。危急存亡のとき自らを犠牲にしてまで援助の手を差し伸べてくれるのは家族しかいない。家族はなぜ助け合うのか。それはお互いが持っている共通の遺伝子を守ろうとするからだ。そうした人間の本能的な部分を考慮に入れなくて、国家が家族に取って代わろうとするような福祉政策がうまくいくわけがない、というのが彼の持論であった⁴⁴。

シンガポール政府は国民が安楽に暮らせる方法よりも、しっかり働く方法を優先して政策に取り入れている。リーが最も心配していることは、西洋化や物質的豊かさによって、かつて、建国途上のシンガポールの労働者たちが持っていた内なる強さ——別の言い方をすればハングリー・スピリットを失うのではないか、ということであった。それはシンガポール人のエトスの変化という文化の問題である以上に、リーにとっては国の生存に関わる問題であった⁴⁵。

そのためにリー・クアンユーが採用した考え方の1つが個人よりも集団の優先ということであった。1966年の学校長会議で学校教育

では個人志向の子どもではなく集団思考の子どもを育てることが大事であると訴えた。リーはシンガポールをソ連と向かいあったフィンランド、アラブ世界に取り囲まれたイスラエルにたとえた。にもかかわらず、シンガポールは歴史も伝統も持たない移民社会で、この社会には忠誠心、愛国心といったような固有の国民的反射作用がなく、人々ははてんで個人的生き残りに走っている。したがって、シンガポールは今までとは違った人間を作らなくてはならない。一体感を持ち、個人の生存ではなく、社会の生存を反射的に考える習性を持った生徒を育てるための献身を教師たちに求めた⁴⁶。

アジア的価値への傾斜

リーは一方で、「この小さくなっている世界において、人々が通訳なしで話し合い、理解しあえるようにすることは、大きな貢献です」⁴⁷と英語教育の普及に期待をかけると同時に、「どこかの社会のように、混合英語を話し、考えもなくアメリカ人やイギリス人の猿まねをし、自分自身の基本価値観や文化をもたないのなら、私は率直に言って、この社会、この国が、防衛する値打ちはおろか、建設する値打ちもないとおもっています」⁴⁸と、英語一辺倒でなく、2言語政策の重要性を強調した。

リー・クアンユーがシンガポール人のバイリンガル計画を唱導した1970年代末から、中国系人口に対しては、地方語ではなく北京語の使用運動が繰り広げられた。「マンダリンを中国系コミュニティの共通語に使用」(1979年)、「マンダリンを話し、地方語をやめよう」(1980)、「公の場ではマンダリンで話そう」(1981年)、「職場でマンダリンを」(1982年)、「マンダリンを学べ、マンダリンを話せ」

(1984年)、「中国系ならマンダリンを」(1985年)、「マンダリンでいこう、地方語はやめて」(1986年)、「もっと使おうマンダリン」(1987年)、「マンダリンを生活の中に」(1989年)、「中国系ならマンダリンで声明を」(1990年)、「マンダリンを中国系シンガポール人に」(1991-1992年)、「マンダリンを使えばきっと役に立つ」(1993年)、「使えマンダリン—使うか失うかだ」(1994-1995年)⁴⁹という徹底したキャンペーンで中国系市民の福建・潮州語使用を北京語へと半ば強制的に切り替えていった。

リー・クアンユーのいわゆるアジア的価値への傾斜の背後には何があったのだろうか。

シンガポールの価値とは、本来、アジア的価値ではなく、“金銭神論”(moneytheism)であった。1970年代が終わるまでシンガポール人は儒教などには目もくれなかった。1970年代初めごろまでは、偽善的なところ、残酷なところなどもひっくるめて、シンガポールはイギリスのビクトリア時代の知的風土や社会価値によく似たものをもっていたといわれる。1970年代にシンガポール人の多くが豊かな暮らしを実現した後、社会・文化的な面での国づくりに関心が寄せられるようになった。シンガポール人が自らたましいのありかが気になるようになったのである⁵⁰。

リー・クアンユーは言った。「われわれはいずれも激しい変化のさなかにある。と同時に、われわれの過去と結びつく証を手探りして求めている。われわれは過去に別れを告げた。われわれの周りには過去はかけらもなくなった。そのことでわれわれは不安になっているのだ」⁵¹。

ところで、ジョン・エンブリーはアジアの社会構造を tightly structured society と loosely structured society の2つのタイプ

で対比させようとした。前者は日本など東北アジアの社会のできあがりかた、後者がタイなど東南アジアのそれといわれてきた。

シンガポールは地理的に東南アジアにあり、周囲をマレー系の国々に取り巻かれている。人口構成は中国系、マレー系、インド系と多様であるが、過半数は中国系である。1965年のマレーシアからの分離独立にあたって、リー・クアンユーら人民行動党の幹部は、シンガポールを tightly structured society に作り上げ、国民をそのような構成員に育て上げることを目標にした。シンガポールが今後生き延びていけるかどうか。それは社会の構成員の生存のためのやる気とスタミナにかかっていた。こうした生存そのものが危ぶまれるような独立当初の雰囲気と、指導的な政党である人民行動党の強固な国民統制の方針によって、シンガポールでは多党制の政治が根づかなかった。生存のための必要条件として、国民1人1人に対して、秩序と規律と貢献を要求する社会にあっては、競争的な政党システムは発展しえなかった⁵²、という背景説明がなされている。

英語で育ち、ケンブリッジに学び、スエズ以東もっとも英国人らしい人物と称せられたリー・クアンユーが儒教や中国の伝統や文化、アジア人らしさ、アジア的価値を中年以降になって持ち出したのは、なぜか。彼の場合、加齢による先祖がえり現象など考えにくい。

リー・クアンユーは儒教的価値について次のように書いている。

親に対する孝、正直、勤勉、儉約、友人に対する誠実、国家に対する忠誠などの儒教的価値は法制度の重要な支柱である。従う者には褒美を、反するものには罰を与えることで、われわれはこうした伝統的価値を

強化した。同時に、中国儒教の暗黒面であるネポティズム、えこひいき、不正の絶滅につとめた⁵³。

それらはすべて、生産や経済成長をささえる道具として導入されたものだ、とベン・フアット・チュアは見なす。それはまた、究極的には、人民行動党の支配を安定化させるための支えとして利用された。1984年には道徳教育と宗教知識の授業が中学校の必須科目として導入された。しかし、1989年になると、儒教や宗教知識の授業は中学校で廃止された。社会問題や政治問題とかかわりをもつ宗教活動が規制されるようになった⁵⁴。

シンガポール人が足早な近代化の代償として失ったものは、言論の自由に始まって街角でチューインガムを買う自由にいたるまでの、一連の個人的権利の制限である、というのはよく知られていることだ。しかし、シンガポール人がささげた犠牲はそれにとどまらない、といわれる。シンガポール人は伝統文化とアジア人としてのアイデンティティーを引き換えにした。伝統文化、アイデンティティーとも、いったん失われると取り返すのは言論の自由以上に難しい⁵⁵。

そこで、急激な経済成長にともなう社会・文化的な変化、とくに西洋化と個人主義化を食い止め、勤労と儉約と家族の結束を維持するため、これをいわゆるアジア的価値と称して、近代化の行き過ぎの歯止めとして導入した。同時に PAP 政権は経済的な豊かさにもなって増大してくる政治の民主化要求に対して、一方で参加の枠を広げるとともに、他方で政治参加の行き過ぎが生じないように、注意深く監視するアジア的リーダーシップのスタイルを作り上げた⁵⁶。

リー・クアンユーの唱えるアジア的価値の

核心には儒教思想がある。儒教思想の根っこにあるものはコンセンサスである。別の言い方をすると、ディベートの回避だ。リー・クアンユーはこれをアジア的価値とし、西洋思想を個人主義的・自己中心的と定義した。シンガポール国民を儒教精神を骨格とするアジア人に育て上げるためには問題が一つあった。シンガポールには儒教についての専門家がいなかったのである。そこで、シンガポール政府はアメリカなどから儒教思想の専門家を招致し、そもそも儒教思想とは何であるかを政府の要人たちに語らせた⁵⁷。

市民のディレンマ

フィリピン、タイ、台湾、韓国などのアジアの途上国の民主化を中間層の規模の増大と関連づける説が流行した時代、例外としてのシンガポールがその仮説の説得力を弱めた。シンガポールは東南アジアでは圧倒的に豊かな生活を享受し、人口に占める中間層の厚みも他の近隣諸国にぬきんでている。

シンガポールにおいて中間層が民主化運動の担い手になりにくい事情を、ベン・フワット・チュアは次のように説明する。

シンガポールで政治的に政府与党と対立することは、危険であり多くの経済的損失を生じさせる。政府は敵対的な個人の言動を油断なく見張っている。多くのシンガポール市民の生活は直接、間接にシンガポール政府とその外郭団体と結びついている。私企業もライセンスや手続き面で政府にコントロールされている。したがって、政府と対立するということは生活の基盤を危うくすることである、とシンガポールの中間層は知っている。

また、人民行動党政権はシンガポール市民に物質的には恵まれた生活を与えてきた。中間層がその最たる恩恵の享受者であった。シ

シンガポール・ウォッチャーは、以上のことからシンガポールでは中間層は民主化の担い手にはなりえず、むしろ体制維持に回るのである、と説明する。

これは一時期、スハルト政権下の開発路線の恩恵を受けて育ったインドネシアの中間層がスハルト打倒・民主化運動の担い手にはなり得ないという悲観論の説明に用いられた論理と同じである。

このような市民のディレンマはまた、体制側のディレンマでもある。リー・クアンユー政権の効率主義、勤勉、規律、秩序、監視の体制の中で、リー・クアンユーがあてにしている優れた知性を持つ中間層の人々が政治に興味を失い、私的領域における楽しみと刺激を求める生活にふけるようになったのである。リー・クアンユーの政治手法がもたらした、リー・クアンユーのディレンマであった。⁵⁸

政治は生か死の問題

リー・クアンユーにとって、シンガポールの生存が彼の政治目標の中で最大のものだった。マラヤ連邦との合併を推し進めていた1961年、リー・クアンユーは合併が不可避の選択であることを国民にラジオで呼びかけた。マラヤ連邦はシンガポール経済を支えるゴム、スズを生産する後背地であり、シンガポールを支える基盤である、彼は訴え、「我々は単独では生存できません」と強調した⁵⁹。

朝日新聞のインタビューで政治哲学を聞かれて、リー・クアンユーは次のように答えたことがあった。

私の世代は「政治家になった」わけではありません。政治があったのです。戦争、苦難、反植民地主義、種族・宗教・言語をめぐる紛争が我々を巻きこんだので

す。我々は秩序と安全を回復しなければならず、そうして初めてみんなが働くようになり、発展ができたのです。途上国にとって政治は生か死の問題、食料か飢餓か、健康か疾病かの問題なのです。強力かつ廉潔な指導者なくしては何も達成できません⁶⁰。

シンガポールがアジア有数の豊かな国になったのちも、リー・クアンユーにとって、政治はなお生か死の問題であった。1994年、マイケル・フェイの鞭打ち刑が世界のジャーナリズムの話題になった。オーストラリア訪問中だったリー・クアンユー上級相は「やり方が野蛮だとおっしゃるのであれば、18歳の少年を連れてシンガポールに来ないでいただきたい。連れていらっしゃる場合は、子どもに行為とその結果についてきちんと警告しておいていただきたい」と、問題は罪と罰に関する単純なものであると強調した。リーは現代西洋で力を得ている人間に関する性善説を、wishful thinkingであると退けてきた。社会の秩序を保つには、権力による強制が必要であると彼は信じていた。シンガポールには秩序が必要と彼は考えた。そうでないと、シンガポールから外国の投資が逃避することになり、シンガポールは壊滅的な打撃を受けるであろう、とリーは考えていたのであった⁶¹。

シンガポールの政治においては、政党である人民行動党とシンガポール政府が不可分に一体化している。野党は人民行動党から政権を奪取できるようなプログラムをもったことがない。また、かりに政権の座についたとしても、人民行動党の一部となってしまった政府の機構を動かすだけの能力と権威を持っていない。シンガポールの政党編成は人民行動党によるガリバー型寡占が続いてきた。した

がって、シンガポールの野党は、人材に欠け、資金に欠け、政策立案能力に欠け、政権担当の意欲さえない。シンガポール政治が民主政治に必要な複数政党制を認めている証明として、与党に必要とされているだけである⁶²。

チェリアン・ジョージは皮肉たっぷりにリー・クアンユーの人民行動党プレスの関係を次のように戯画化して語っている。政権とシンガポールのプレスは新聞発行ライセンス、資本、国内治安法などの関連法によってプレスの自由を拘束されている。シンガポールにおけるプレスの自由とはプレスのオーナーが彼らの個人的あるいは階級的利益を追求する自由であると、冗談半分に言われる。シンガポールにおいては、選挙で成立した政府は民主的言論の具現化であるとされる。政府は人民の意志を代弁している。プレスは選挙によって成立したものではない。したがって政府は個人的な商業上の利益や矮小なイデオロギー上の使命、ジャーナリストの肥大化した傲慢なエゴから守られなくてはならないとされる。自由民主主義の国々では問題はすべからず政府からのプレスの自由である。シンガポールにおいては、問題はプレスからの政府の自由である⁶³。

リー・クアンユーにとって、政府は国民以上に守るべき価値のあるものだった。彼にとっては「政府あっての国民」だったのである。

5. おわりに——家長去りしの子

サミュエル・ハンティントンは、シンガポールの清潔で効率的な政治は民主的な価値と制度によって裏打ちされたものではないので、シンガポールの建国者であるリー・クアンユーなき後は生き残ることができないだろう、と言ったことがある⁶⁴。リー・クアンユーな

きあとは、シンガポール国民をひとつに束ねておくだけの力を持った政治家がいなくなり——ティトー後のユーゴスラヴィアのようなひどいことになることはもちろんないし、インドネシアのスハルト後にみられたような民主化の進展と同時に政治や社会の制度的な混乱が同居する時代の可能性も低いが——統制のとれた経済発展の継続は難しくなろうという予言であった。

民主的な価値と制度の裏づけが効率的で清潔な政治の継続の必要条件か、という議論はひとまずおく。リー・クアンユーの時代のシンガポール政治の特色は、政策決定の仕方においては明らかに権威主義的でありながら、表面的には民主的な政治運営行われているという印象を与えた⁶⁵。それがリーの政治手法だった。彼は洞察力を持って問題の処理の方向をきめ、国民に対してそのような選択をするよう熱心に説得した。つまり、問題への対処法そのものはリーによってすでに決められており、それに賛成するよう国民を説得するのが、党と政府の仕事だった。そのような政府提案に確信的に反対を唱える勢力にはそれなりの懲罰があたえられた。

おそらく、このことがポスト・リー・クアンユーのシンガポールの不安材料なのであろう。リー・クアンユーはかつて、つぎのような言い回しで、シンガポールにおけるエリート主導の政治の必要性と、同時に、その危うさを語ったことがあった。国家発展の要諦は、①安定した政治情勢②高度の教育と訓練③技術的により高いレベルの産業をひきつける能力④生活水準の向上・清潔で優美な環境⑤優秀な軍隊である。しかし、シンガポールでは中国系、マレー系、インド系の人々がそれぞれ勝手な主張をとなえている。このままでは、シンガポールは引き裂かれてしまいそうだ。

シンガポールの経営はいま 300 人ほどの指導者の肩にかかっている。この 300 人が同じジャンボ機に乗って、その飛行機が墜落したとすれば、シンガポールは消滅する、とリー・クアンユーは言った⁶⁶。

リー・クアンユーにとっての気がかりは、豊かになったシンガポール人の子どもたちのことであった。子どもたちはシンガポールを担う次の世代である。その子どもたちが危険なまでに軟弱になっているとリーは感じていた。過酷な労働を重ねてやっとここまでの豊かな生活を築きあげた親たちには、子どもたちに自分たちが味わえなかった愉悅を与えようとする。遊び、お菓子、おもちゃ、ジーンズなどなど。そのようなものに取り囲まれてテレビを見ている子どもたちは、リーにとって不安の種であった⁶⁷。

結局のところ、出来上がったシンガポールは、西洋社会に似たフリーライダーとヘドニスティックな行為をめぐる問題が蔓延する社会であった⁶⁸。「この問題についてあなたのオピニオンは？」と質問され「オピニオンって何ですか？」という返事が返ってくる一方で、ショッピング天国でもあるシンガポール⁶⁹。リー・クアンユーが彼の手法でシンガポールを発展させればさせるほど、少数の例外を除いて、市民社会 (civil society) という言葉に心を揺り動かされるような人はなくなった。高い教育を受け、いい暮らしをしている公共的活動にうってつけの人でさえもそうだった。それは、シンガポール政治の次のような法則の反映である、とチェリアン・ジョージは指摘する。シンガポールで公的な事柄に関わるには物理の法則のように拘束性の高いシンガポール政治の現実に従わなければならない。シンガポール政治の第 1 法則—政府は政治的真空を嫌う。政府はあらゆる空間を埋

めあらゆる事柄を統制することを欲する。シンガポール政治の第 2 法則—市民による行動のすべてが、政府からの反作用を呼び起こす。この反作用は非常に大きい⁷⁰。

このように、これまでリー・クアンユーが締めすぎたタガを、今後どういう風に緩めてゆくか。初代首相の息子が 3 代目の首相に就任したポスト・リー・クアンユーのシンガポールの課題はこの 1 点にある。

[注]

¹ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学 (下) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社、1988 年、242 ページ。

² Lee Kuan Yew, *The Singapore Story: Memoirs of Lee Kuan Yew*, Times Editions, 1998 の表紙カバーの推薦の辞から。

³ Fareed Zakaria, "Culture is Destiny: A Conversation with Lee Kuan Yew," *Foreign Affairs*, March/April 1994.

⁴ Lee Kuan Yew, *From Third World to First: The Singapore Story 1965-2000*, New York, HarperCollins Publishers, 2000, p. 663.

⁵ Fareed Zakaria, "Culture Is Destiny: A Conversation with Lee Kuan Yew," *Foreign Affairs*, March/April, 1994.

⁶ Lee Kuan Yew, *From Third World to First: The Singapore Story 1965-2000*, New York, HarperCollins Publishers, 2000, p. 278.

⁷ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学 (下) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社、1988 年、361 ページ。

⁸ Han Fook Kwan, Warren Fernandez and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, p. 242.

⁹ 竹下秀邦『シンガポール リー・クアンユーの時代』アジア経済研究所、1995 年、464-469 ページ。

¹⁰ Han Fook Kwan, Warren Fernandez and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, p. 123.

- ¹¹ Han Fook Kwan, Warren Fernandez and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, p. 247.
- ¹² 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(上) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 370-371 ページ。
- ¹³ Lee Kuan Yew, *The Singapore Story: Memoirs of Lee Kuan Yew*, Times Editions, 1998, p. 28.
- ¹⁴ Fareed Zakaria, "Culture is Destiny: A Conversation with Lee Kuan Yew," *Foreign Affairs*, March/April 1994.
- ¹⁵ James Minchin, *No Man Is an Island: A Portrait of Singapore's Lee Kuan Yew*, North Sydney, Allen and Unwin, 1990, p. 258.
- ¹⁶ リー・クアンユー, ファリード・ザカリア「文化は宿命である」フォーリン・アフェアーズ・ジャパン編訳『フォーリン・アフェアーズ傑作選 1922-1999』朝日新聞社, 2001年, 89 ページ。
- ¹⁷ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(下) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 52-54 ページ。
- ¹⁸ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(下) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 62-65 ページ。
- ¹⁹ ベンサム『道徳および立法の諸原理序説』(『世界の名著 38 ベンサム, J. S. ミル』) 中央公論社, 1967年, 82 ページ。
- ²⁰ Han Fook Kwan, Warren Fernandez and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, pp. 129-130.
- ²¹ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(上) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 155 ページ。
- ²² 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(上) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 158-159 ページ。
- ²³ Hussin Mutalib, *Parties and Politics: A Study of Opposition Parties and the PAP in Singapore*, Singapore, Eastern University Press, 2003, p. 22.
- ²⁴ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(下) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 221 ページ。
- ²⁵ Han Fook Kwan, Warren Fernandez and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, p. 229.
- ²⁶ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(下) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 296-305 ページ。
- ²⁷ 竹下秀邦『シンガポール リー・クアンユーの時代』アジア経済研究所, 1995年, 442 ページ。
- ²⁸ Han Fook Kwan, Warren Fernandez and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, p. 172.
- ²⁹ Han Fook Kwang, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, p. 385.
- ³⁰ Han Fook Kwan, Warren Fernandez and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, p. 207.
- ³¹ Beng-Huat Chua, *Communitarian Ideology and Democracy in Singapore*, London and New York, Routledge, 1995, p. 161.
- ³² 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(上) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 64-65 ページ。
- ³³ Michael Hill and Lian Kwen Fee, *The Politics of Nation Building and Citizenship in Singapore*, London and New York, Routledge, 1995, p. 61.
- ³⁴ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(下) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 92 ページ。
- ³⁵ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(下) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 157-163 ページ。
- ³⁶ Han Fook Kwang, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, p. 380.
- ³⁷ Han Fook Kwan, Warren Fernandez and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, p. 196.
- ³⁸ Lee Kuan Yew, *From Third World to First: The Singapore Story 1965-2000*, New York, HarperCollins Publishers, 2000, p. 664.
- ³⁹ Han Fook Kwang, *Lee Kuan Yew: The Man and His*

Idea, Singapore, Times Editions, 1998, p. 331.

⁴⁰ Han Fook Kwang, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, p. 337.

⁴¹ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(上) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 137-138 ページ。

⁴² 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(上) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 243-244 ページ。

⁴³ Han Fook Kwan, Warren Fernandez and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, pp. 159-161.

⁴⁴ Han Fook Kwan, Warren Fernandez and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, p. 163.

⁴⁵ Han Fook Kwan, Warren Fernandez and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, p. 191.

⁴⁶ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(上) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 176-181 ページ。

⁴⁷ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(下) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 12。

⁴⁸ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(上) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 16 ページ。

⁴⁹ Nirmala Srirekam Puru Shotam, *Negotiating Multiculturalism: Discipling Difference in Singapore*, Berlin, New York, Mouton de Gruyter, 2000, p. 73.

⁵⁰ Michael Hill and Lian Kwen Fee, *The Politics of Nation Building and Citizenship in Singapore*, London and New York, Routledge, 1995, pp. 195-196.

⁵¹ Fareed Zakaria, "Culture is Destiny: A Conversation with Lee Kuan Yew," *Foreign Affairs*, March/April 1994.

⁵² Thomas J. Bellows, *The People Action Party of Singapore: Emergence of a Dominant Party System*, New Haven, Yale University Press, Yale University Southeast Asia Studies Monograph Series, No. 14, 1970, p. 113-114.

⁵³ Lee Kuan Yew, *From Third World to First: The Singapore Story 1965-2000*, New York, HarperCollins Publishers, 2000, pp. 647-648.

⁵⁴ Beng-Huat Chua, *Communitarian Ideology and Democracy in Singapore*, London and New York, Routledge, 1995, pp. 120-121.

⁵⁵ Cherian George, *Singapore: The Air-Conditioned Nation*, Singapore, Landmark Books, 2000, p.170.

⁵⁶ Brigitte Sie Kok Hwa, *Singapore, a Modern Asian City-State: relationship between cultural and economic development*, no city, no publisher, 1997, p. 338.

⁵⁷ John Clammer, *Race and States in Independent Singapore 1965-1990*, Aldershot, England, 1998, pp. 187-189.

⁵⁸ Beng-Huat Chua, *Communitarian Ideology and Democracy in Singapore*, London and New York, Routledge, 1995, pp. 207-208.

⁵⁹ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(上) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 22-25 ページ。

⁶⁰ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(下) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 220 ページ。

⁶¹ Han Fook Kwan, Warren Fernandez and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, pp. 193-195.

⁶² Jon S. Quah, "The 1980s: A Review of Significant Political Developments," Ernest C.T. Chew et al., *A History of Singapore*, Singapore, 1991, pp. 389-391.

⁶³ Cherian George, *Singapore: The Air-Conditioned Nation*, Singapore, Landmark Books, 2000, p.69.

⁶⁴ Han Fook Kwan, Warren Fernandez and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, p. 150.

⁶⁵ Chan Heng Chee, "Political Developments, 1965-1979," Ernest C. T. Chew and Edwin Lee, *A History of Singapore*, Singapore, Oxford University Press, 1991, pp. 178-179.

⁶⁶ 田中恭子訳『シンガポールの政治哲学(上) リー・クアンユー首相演説集』井村文化事業社, 1988年, 345-346 ページ。

⁶⁷ Han Fook Kwan, Warren Fernandez and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Idea*, Singapore, Times Editions, 1998, p. 187.

⁶⁸ Michael Hill and Lian Kwen Fee, *The Politics of Nation Building and Citizenship in Singapore*, London and New York, Routledge, 1995, p. 249.

⁶⁹ 花崎泰雄「楽園の裏側—シンガポール 2001」『埼玉大学紀要 教養学部』第37巻1号, 44ページ。

⁷⁰ Cherian George, *Singapore: The Air-Conditioned Nation*, Singapore, Landmark Books, 2000, p.127.